福二中 校長室だより

ほたる雪

NO.92

つなぐ力

本日の卒業式にあたり、福島市長様をはじめ、多数のご来賓、並びに保護者の皆様のご臨席を賜り、平成二十七年度福島第二中学校卒業証書授与式が挙行できますこと、謹んで御礼申し上げます。

さらに、今日の門出の日を心待ちにされていた保護者の皆様、義務教育九ヶ年を修了し、このように心も身体も立派に成長し、今、学び舎を巣立とうとしているお子様の姿を目の当たりにして、さぞかし感無量のことと拝察いたします。本日は誠におめでとうございます。また、これまでの本校へのご支援とご協力に対し、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

さて、皆さんの前で話すことも、今日が最後になりました。私が君たちにしてやれる最後の別れの教育です。

百十三名の卒業生の皆さん、卒業、本当におめでとう。くしくも、今から五年前の今日、午後二時四十六分、東日本大震災が一瞬にして数多くの尊い命を、あたたかい住まいを、美しい故郷をのみこみました。

五年の時の流れを振り返り、そして栄えある門出の日に際し、改めて共に命あることの喜びと、生かされていることへの感謝の気持ちをかみしめてもらいたいと思います。

震災直後、被災地の中学校でのある卒業生の答辞が今でも忘れられません。

自然の猛威の前では人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というにはむごすぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。しかし、苦境にあっても天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことがこれからの私たちの使命です。

その姿、その声から被災地の中学生が受けた衝撃の大きさ、心の傷の深さが痛々しいほど伝わってきました。そして何よりも、悲しみをこらえながら「苦境にあっても天を恨まず」と声を振り絞って述べる姿は、苦難の中でも人間が生きようとする瞬間を映し出しているように見えました。

その時、私はまさしく教育は生き残ったと感じました。あれから五年、あの中学生は今年成人を迎えました。どんな若者に成長しているのでしょう。

学校現場では、それまで「生きる力」という言葉で、君たちに身につけさせる力が語られていました。「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」といったものです。しかし、この言葉はどれほどみずみずしい言葉として受け止められ、伝わっていたでしょうか。

今回の大震災は、「生きる力」を根源的に問い直す出来事でありました。

過酷な状況の中にあっても生きることへの意思を強く持ち続け、厳しい避難所生活に耐えた被災者、空き地にテント張り、長期に渡り復興への支援を続けたボランティアの若者、医療関係従事者をはじめとする自衛隊、警察、消防署員の救援部隊の身を粉にした不眠不休の姿、被害拡大を防ごうとした電力会社の人々の命をかけた行動、そして祈りながら帰りを待つ家族の姿、震災を理由に子どもたちの学力を犠牲にしてはならないと自らを奮い立たせた教師・・・。

それぞれの姿が見せた人間としての尊厳、献身、犠牲、祈り、使命感は、みずみずしさで溢れていました。私たちに生きることの意味を問い直すものでした。

そして今、静かに当時を振り返るとき、これからの社会を形成していく上で基盤となるもの、社会を生き抜く中で身につけなければならないものが浮かび上がってきます。

それは、「つなぐ力、つながる力」です。

先の大震災は、各地とのつながり、世界とのつながり、組織と組織、組織と個人、人間同士のつながりなど、様々なつながりの大切さを示しました。

このつながりにどれほど励まされ、癒され、生きる気力をもらったことか。しかし、つながることには困難さが伴います。相互理解の難しさがあり、時に対立や分裂を生みます。

「つなぐ力」の原動力となるのは当事者意識です。当事者意識とは、他者の痛みに心を寄せることです。心を寄せることで人の痛みに響感する力、人のために行動する力が生まれてくるのです。新たな学力、生きる力として、この「つなぐ力、つながる力」を身につけていってほしいと願います。

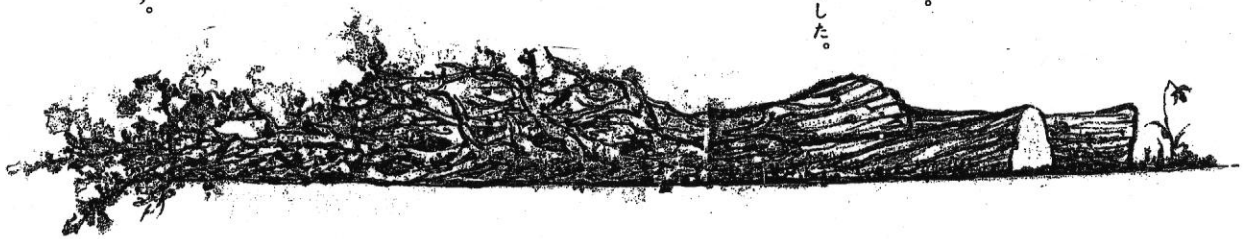
君達一人一人が、今こそしっかりと学び、そうした力を身に付けていくことが、福島創成の礎を築くものと信じます。

別れの時がきました。

君たちが通り過ぎたあとに、ちょっぴりさびしい、そして薫り高い春風が吹き渡ります。君たちはまさに春を呼ぶ主役です。残された私たちに、学校にまた春がやってきます。

在校生、教職員一同、やがて訪れる本当の春の日まで、君たち主役の活躍を願って式辞といたします。

平成二十八年三月十一日　福島市立福島第二中学校長　佐藤　和彦



あなたへ

小泉周二

やったあ
と叫んでください
ああああ
とくやしがってください
わあきれい
とうっとりしてください
伝えてください
あなたを